

湘南の由来とエリアを探る

その6

瀟湘八景図・牧谿と玉澗

—湘南の原風景を描いた巨匠たち—

和田精二

2017.07.15

6-1 湘南の元風景「瀟湘」

これまでに調べた結果から、中国の「瀟湘(しょうしょう)」地域は伝説・神話・文学に彩られた風光明媚な名勝地であり、中国人にとって特別な思いのある地域であること、この地域をテーマとして「瀟湘八景」という絵画形式が発表され、士大夫や禅僧などの知的エリートの間で「瀟湘八景図」を描くことが流行ったこと、その渦中で禅僧「牧谿(もっけい)」による名作「瀟湘八景図」が創出され、禅文化を積極的に取り入れていた日本に作品が渡ったこと、などが理解できました。

なぜ「瀟湘」という呼称ではなくて「湘南」という呼称が日本に伝わり定着したのか、なぜ「瀟」ではなくて「湘」のみが伝わったのかという疑問が残りますが、今回は「瀟湘」が日本にどのようにして伝わり、どのような経緯を経て「湘南」呼称として定着したのか、その辺りから探ってみたいと思います。

ここで仮説として考えられるのは、①「湘南」呼称伝来の中心に牧谿の「瀟湘八景図」があった。②「湘南」呼称が定着する過程に中国から渡来した禅僧や日本から留学した禅僧たちの行動が作用した。の2つです。

ところが、この辺りが浅学非才人間の限界でして、牧谿以外にもう1つ海を越えた超一流の「瀟湘八景図」が存在したことをごく最近知りました。それを描いた画僧(天台宗)こそ牧谿と並び称され、雪舟、雪村はじめ室町時代の日本の水墨画家に多大な影響を与えた「玉澗(ぎょくかん)」です。そこで前記の仮説の修正をしておきます。

『ここで仮説として考えられるのは、①「湘南」呼称伝来の中心に牧谿と玉澗の「瀟湘八景図」があった。②「湘南」呼称が伝来し定着する過程に中国から渡来した禅僧や日本から留学した禅僧たちの行動が作用した。の2つです。』

6-2 牧谿と玉澗の「瀟湘八景図」を観た！

本稿を執筆中に、信じられない幸運が転がりこんできました。丸の内・出光美術館で「水墨の風」と銘打った企画展(6/10-7/17)が開催されていたのです。この企画展のサブタイトルは「長谷川等伯と雪舟」。室町時代に中国から伝わった斬新な絵画表現である水墨画を考える上で欠くことのできない2人の水墨画家にスポットライトを当てた企画展です。「雪舟」は中国に渡って日本と全く異なる画法を学びますが、彼が最も執着したのが「玉澗」と言います。一方、狩野永徳と並び桃山時代を代表する画人、長谷川等伯が画業を一変させるほどの影響を受けたのが「牧谿」と言います。この「雪舟」と「玉澗」、「長谷川等伯」と「牧谿」を軸に水墨画の世界の一端を展開してくれる企画展が目の前に現れたのです。



図1 「水墨の風」企画展ちらし 出典：出光美術館ちらし 2017

ここまではさして驚くことでもありませんが、会場の先頭に並んでいた2幅の掛け軸、玉澗の「山市晴嵐図(さんしせいらんず)」と牧谿の「平沙落雁図(へいさらくがんず)」こそ、玉澗と牧谿が描いた「瀟湘八景図」だったとなると驚きの度合いが違ってきます。

牧谿の「瀟湘八景図」を出光美術館が所蔵していることは事前に把握していましたが、うかつにも玉澗の「瀟湘八景図」も同美術館が所蔵していたことは想像外のことで、気づいたのは帰宅後に会場で購入した図録を読んだ時でした。

6-3 垂涎の的だったふたりの「瀟湘八景図」

そこで、牧谿の「瀟湘八景図」と玉澗の「瀟湘八景図」について取りまとめた結果が以下の表1・表2です。玉澗の「瀟湘八景図」は3幅しか現存していませんから、牧谿と玉澗の「瀟湘八景図」を同時に観ることが出来たこと、それも本原稿を執筆中というタイミングで観ることが出来たことは殆ど奇跡に思えます。あらためて、両者を出光美術館が所蔵していたという事実に感謝！ですね。

画題	所蔵先	指定	伝来
煙寺晩鐘図	富山記念館	国宝	松永久秀、織田信長、徳川家康、紀州徳川家、加州前田家
漁村夕照図	根津美術館	国宝	
平沙落雁図	出光美術館	重文	豊臣秀吉、上杉景勝、徳川秀忠、松平忠直
遠浦帰帆図	京都国立博物館	重文	織田信長他
洞庭秋月図	徳川美術館		
瀟湘夜雨図	個人蔵		
江天暮雪図	個人蔵		
山市晴嵐図	現存せず		

表1 「牧谿」が描いた「瀟湘八景図」8幅の所在

画題	所蔵先	指定	伝来
煙寺晩鐘図	不明		
漁村夕照図	不明		
平沙落雁図	不明		
遠浦帰帆図	徳川美術館	重文	
洞庭秋月図	文化庁	重文	
瀟湘夜雨図	不明		
江天暮雪図	不明		
山市晴嵐図	出光美術館	重文	中屋壮悦、大友宗麟、豊臣秀吉、金森可重、松平治郷

表2 「玉澗」が描いた「瀟湘八景図」8幅の所在

今回観ることのできた牧谿と玉澗の「瀟湘八景図」は、もともとは八景をまとめて一巻に仕立てた「巻物」でしたが、足利将軍家が所蔵した段階で裁断され、東山御物の印が押され、八幅の茶会用の掛け軸に改変されてしまったようです。

もうひとつ驚いたのが、それぞれの「瀟湘八景図」の伝来です。牧谿の「平沙落雁図」の場合は、足利将軍家の手元を離れた後、松永久秀、織田信長、徳川家康、紀州徳川家、加州前田家という具合に所蔵先が変わっていきました。一方の玉澗の「山市晴嵐図」も、豊後の豪商・中屋壮悦、大友宗悦、大友宗麟、豊臣秀吉、金森可重、松平治郷（不味）という具合に持ち主が変わりました。当代1級の権力者やら豪商やら茶人の手元から手元へ掛け軸が移動した訳で、牧谿と玉澗の「瀟湘八景」



図2 牧谿 煙寺晩鐘図



図3 牧谿 漁村夕照図



図4 牧谿 平沙落雁図



図5 牧谿 遠浦帰帆図

が、いかに権力者たちにとって垂涎の的であったかが偲ばれます。戦国時代以降、東山御物を筆頭として、いわれのある茶道具が軒並み値を上げていきましたが、牧谿や玉澗の絵画も例外ではなかったようです。

6-4 牧谿、玉澗の人と作品について

図2から図5に示した牧谿の「瀟湘八景図」と、図7と図8に示した玉澗の「瀟湘八景図」は、「湘南」の原風景を表現するのに相応しい雰囲気や構図を漂わせているように思えます。霞の切れ

間に垣間見える瀟湘の景観を表現する上で水墨画技法の果たす役割の大きさに感動するものの、水墨山水画を見慣れていないだけに戸惑いもあります。そのようなときに、光が溢れている絵画で有名なレンブラントの絵と比較してみるという考え方に興味を引かれて読んだ本がありますので一部を紹介しします。(宇佐美文理 「中国絵画入門」)

『西洋絵画で「光」と言えば、まず思い浮かぶのがレンブラントであろう。「夜警」に見えるように、確かにレンブラントの絵画には光が溢れている。そして重要なのは、レンブラントの絵画は「光と影の絵画」だ、ということである。誤解を恐れずに言うなら、レンブラントの絵画は「光に照らされる、光があたっている」絵画である。』



図6 レンブラント 夜警 (17世紀 アムステルダム美術館)

『牧谿の光は、しばしば指摘されるように「気そのものが輝いている」光である。光が3次元空間に充満している。「空気」が光っているのである。それが照らされた光でないということは、「煙寺晚鐘図」の方が分かりやすいかも知れない。霞にけむる寺の表現だが、その霞自体が光を持っている。要するに「明るい」と日本語で言われるときの、その明るい空気そのものを表現しているのである。』

『風と光というものの自体が、実体的に、目に見えるものとして描かれる。いわば見えなかったはずの気を、気そのものとして「形象化して」、しかも「見えるがままに」表現することになったと言えよう。そして牧谿の光は「大気の光」である。もっと単純に「気の光」と言ってもいい。空間そのものが光となっている。』

実際に牧谿の作品を前にした時の感想として、これ以上の表現を思いつきません。それこそ「気」そのものが輝いているように見えたのです。豊臣秀吉や徳川秀忠がどのような感性を持

って牧谿の「平沙落雁図」と対峙したのか、知る由もありませんが、「瀟湘」のイメージを日本に移入する際のビジュアルな媒体として水墨山水画の果たした役割の大きさに注目したいと思います。「湘南」のイメージ形成が茶会の席での掛物を通じた会話段階から始まっていたのかも知れませんから。

ここで牧谿について要約しておきますと、13世紀後半、宋末、元初の禅僧で四川の出身。浙江に移った後、禅宗の高僧無準師範について修行し、後に六通寺を復興したとあります。賈似道のような大物政治家と関係があったことから、当時は画家として十分評価され、江南山水画の主流に位置づけられたとする説もありますが、一方で異端児扱いされたという説も見受けられます。

日本ではその画風が非常に「侘びている」として人気を呼び、作品が続々と中国からやってきました。独特な技法により描かれる水墨画は評価が高く、室町時代の水墨画にも大きな影響を与え、多くの追隨者を生みました。能阿弥の「四季花鳥図屏風」(出光美術館所蔵)のように、牧谿の絵のモチーフを屏風に散りばめた作品まで登場して来ますが、最も熱心に牧谿を学んだ絵師はやはり長谷川等伯と言われています。現在でも、牧谿の優品はほぼすべて日本にあり、中国、台湾、欧米には伝承作を含め、ほとんど存在していないようです。



図7 玉澗 山市晴嵐図



図8 玉澗 遠浦帰帆図

一方の玉澗は、中国の王朝が南宋から元へと交代する時代に活躍した僧侶です。浙江省金華の生まれ。9歳で出家得度し、後に臨安(浙江省杭州)第1の名刹である天台寺院・上天竺寺の書記にまで昇りますが、晩年は故郷の金華に帰郷。諸国遍歴によって高められた画才が知れ渡り、画を求める者が引きも切らなかったと言います。後世においては中国本土よりも日本で広く知れわたり、牧谿と同じく現存する作品は日本に集中しています。その奔放な筆法による水墨山水は「玉澗様」と呼ばれ、

室町以降の典範として、絶大な影響を与えたと言います。

ご寛容いただければ有難いです。

6-5 文士・士大夫文化から禅文化へ

「瀟湘八景図」が数多く描かれた南宋末は、実は本来の士大夫の絵画としての「瀟湘図」から見れば、終焉の時代でもあったようです。俗を離れて雅を求める文人・士大夫（したいふ）にとって、宋迪（そうてき）によって創出され、決まった4字句の題に当てはめて瀟湘地方の見どころを分かり易く表現する画法も、流行のピークを過ぎると求める対象ではなくなり、やがて中国の絵画史の表面に現れることが無くなっていきます。後を継いだのが、より自由な立場にいた禅僧たちで、そこから牧谿の「瀟湘八景図」などの名品が生まれてきました。

中国の水墨画は、南北両宋朝から元朝にかけて、李唐・馬遠・梁楷（りょうかい）・牧谿・玉澗らの名手が輩出、黄金時代を築きましたが、作品の請来と画法の興隆には禅宗が重要な役割を演じました。円覚寺が所蔵している牧谿筆の猿の絵などの事例からも明らかのように、彼我の禅僧の往来に伴ってもたらされた中国の作品を禅僧が多数蓄えて珍重したばかりでなく、自ら絵筆をもつ僧、いわゆる画僧が日本の禅寺内でも育てていったのです。

さて、冒頭に仮説を掲げました。①「湘南」呼称伝来の中心に牧谿と玉澗の「瀟湘八景図」があった。②「湘南」呼称が伝来し定着する過程に中国から渡来した禅僧や日本から留学した禅僧たちの行動が作用した。の2つです。今回は、この内の①について論を展開して来ました。世の中の大抵のことは、必ず核心的なことがあってことが運びます。例えば、「湘南村」という呼称の誕生も、小倉村の戸長、馬場健二がいなければ誕生しなかった可能性があります。そういう意味から「瀟湘」「湘南」という呼称の由来は大事にしたいので、今回は牧谿と玉澗の「瀟湘八景」に執拗にこだわってみました。

一方、今回は②の「湘南」呼称が伝来し定着する過程に中国から渡来した禅僧や日本から留学した禅僧たちの行動が作用した。」という仮説の証明にこだわってみたいと思います。いよいよ禅宗というテーマを正面から扱わないといけな訳です。これはもう私の限界を超えますので避けたいところですが、「湘南の由来」を考える上で禅文化は避けて通れないようです。

今までのように、関連情報をとりまとめて俯瞰すれば「湘南の由来」の道筋が見えてくる、という訳にはいきませんが、今までの独断と偏見路線の修正がききませんので、今後も直しく

6-6 さいごに

冒頭に記したように、なぜ「瀟湘」ではなくて「湘南」という呼称が日本に伝わり定着したのか、なぜ、「瀟」ではなくて「湘」のみが伝わったのかという疑問については、最後まで分かりませんでした。もうひとつ、なぜ「近江八景」や「金沢八景」のように「湘南八景」という景勝地呼称が誕生しなかったのか？についても気になりますが、こちらは「瀟湘」vs「湘南」の謎に比べれば些細なことに思えます。



図9 長谷川等伯 松林図屏風



図10 雪舟 破墨山水図（玉澗・牧谿の隣に展示されていた作品）

◆ 出典資料：

- ・水墨の風・長谷川等伯と雪舟 出光美術館 2017
- ・中国絵画入門 宇佐美文理 岩波新書 2014
- ・花鳥・山水画を読み解く 宮崎法子 角川書店 2003